

わが習志野高校 社会科教諭 大村拓先生による シリーズ連載《本格ミステリ入門（海外編）》・《高校生のための本格ミステリ入門（日本編）》は、全 10 回、約 3 年に渡りました。最終回を終えて、下記の文章を寄せてくださいました。

〇あとがき

大村 拓

以上をもって、「本格ミステリ入門〈海外編〉・〈日本編〉」は完了です。書き始めた頃は、これほどの手間がかかるとは予想していなかったが、結局、丸 3 年の歳月と原稿用紙にして優に 300 枚を超す字数を費やしてしまった。

そもそも本稿の目的は、高校生のような初心者を対象として、本格ミステリの教科書を書こうということであった。初心者向けのミステリのガイドは、古今東西数多く存在するが、本格ミステリに限定したものになると、意外と前例は少ない。そんな無謀な企画に挑戦したのは、私が個人的に本格ミステリを強く愛好していることと、本格ミステリの楽しみ方は、他の文学のジャンルとは違った特殊性をもっているため、少なくとも学校の国語の授業で習うようなものではなく、どこかで指南を受けるべきだと考えたからである。しかし本来読み巧者たちが愛好する本格ミステリの味わい方を、初心者に伝えることは意外と難しいことであった。特に上級者にとっては当たり前の知識や用語の使用はなるべく避け、平易に書くことは結構大変な作業であった。それでいて、江戸川乱歩が戦後直後に確立し、今ではいささか時代遅れになった感のある本格ミステリ観では書く意味がないと考えた。そこで新しいミステリ観も取り入れながら、初心者が楽しく読め、本格ミステリに興味をもってもらえるような内容を心がけた。

さてここによく、完成したわけであるが、少しでも本稿に目をとめ、特に高校生のような若い読者が、本格ミステリのファンになってくれれば、これほどうれしいことはない。

最後に本企画の立案者にして、本稿全般にわたって編集を担当していただいた、習志野高校図書館の菊地三智子司書に感謝を捧げたい。彼女がいなければ本稿は決して完成することはなかっただろう。

それでは、本稿に目を通してくださった読者の皆さん、大変ありがとうございました。本格ミステリによる素敵な読書体験が出来ることを、願っております。



2 年女子図書委員が描いた、大村先生

あとがきをお寄せくださいますと、ありがとうございます。このシリーズが出来上がるきっかけや、途中でのお話をしたいと思います。

企画経緯

平成23年4月に着任した大村拓先生は、着任早々図書館の書架を睨め付けるように眺め、4月1か月に7冊の貸出しを受けている。しかもその間に、「高校生が楽しめると思いますよ。」と『放課後はミステリーとともに』（★913 ヒガ 東川篤哉著 実業之日本社）の購入を勧めてくれている。『放課後はミステリーとともに』は、当時売れ行き好調の本でもあり、早速所蔵とした。その後も「高校生にも読めると思いますよ。」「高校生も知っているといいですよ。」と新書などの購入希望を出してくださった。

大村先生は、足繁く図書館へ来てくれた（習志野高校図書館が値踏みされていると、薄氷を踏む思いだったが…。）だけでなく、どうも推理小説好きであると思うことがあった。

こんな先生は今までいなかった。図書館によく出向いてくださり「高校生」という言葉を重ねて言うてくださる。「これは、図書館蔵書構築に力を貸して下さるに違いない」、と思うのに時間はかからなかった。捕まえては、いろいろとお話を伺うようにしていたところ、5月中には、思った通りミステリ（大村先生は「ミステリー」ではなく「ミステリ」と切る）の知識は半端でなく、とても造詣が深く、そして小学校6年生の時から読書ノートをつけていることを知った。しかも、小学生当時友人たちとミステリの会を作っていたという。これは「只者ではない」。

6月。夏休みの読書会を計画していた。お声をかけさせていただいたところ、引き受けてくださった。そこで、《推理小説 犯人は 誰だ!》と銘打って、鮎川哲也の小説「達也は嗤う」（◎『下り“はつかり”』所収 ★913 ア 東京創元社）をテキストに会は進められることとなった。しかし、7月27日のこの読書会は、甲子園をかけた野球部の試合と重なり（わが野球部は勝ち進んでいた。そして甲子園出場を果たした）、中止になったのである。テキストも用意済みで、残念なことだった。

しかし、このことを覚えていてくださった。貸出冊数の落ち込みが気になりホームページに目玉記事が欲しいと思っていた私と、本格ミステリを高校生に広げたいと思っていた大村先生と、利害が一致したのである。そして、連載を通じて「ホントに只者でない」と思い知ったのである。

連載開始・その途中

連載の話はとんとん拍子にまとまったが、私にとっては、長丁場の連載でどうなるか心細いことであった。「習志野高校図書館ホームページ連載企画 《本格ミステリ入門（海外編）》全5回」、早々の連載開始となった。

いただいた原稿は本文のみであった。が、通常「面だし」というが、高校生には本の表紙を見せたいと思っていた。「この本見たことがある」という親近感が持てることを願い、本の表紙画像の挿入を進めた。一番取り扱いの多い本は東京創元社だったが、元社長の戸川安宣氏の来校をいただけ、お礼を言えたのは幸いなことであった。



2013.02.18 戸川氏来校

しかし、企画本文をどのような形式にするかについて細かい打ち合わせをした覚えがない。自然と体裁は整って行ったのである。不思議なことであった。大村先生の「妥協の産物」だったのかもしれないと思っている。

平成24年度には、《高校生のための本格ミステリ入門（日本編）》と続き、大村先生の校内分掌の重責とともに更新は間が空いた。結果的に3年間を要したシリーズだが、長期休暇期間に休みを削って大村先生には執筆に当たっていただいた。

大村先生には、多分企画の段階から、しっかりと基本構成をお持ちだったのだと思う。国内外全10回という数字も決まっていた。また、本編で脚注は使っていない。使っているのは、海外編のコラムの文中だけである。（コラムは編集担当の執筆で、大村先生ではない）。これは大村先生のお考えによるものである。本文中に語句の解釈を入れ、文中で理解できるようにという配慮なのである。私は後になってようやく理解した。

また、当たり前だが誤字脱字については厳しかった。ホームページに載ったうえでも、たびたび、文章を読み返してくださった。ホームページ上での文字の大きさであるフォント数や、書体、太字は微妙な差なのにすぐに見分けて、文の完璧を求める。それは、意図が伝わるようにという配慮だったに違いない。見習うべきその心を見せていただいた。しかし、当然のことである。

データから見える凄さ！

全シリーズ通してのデータである。羅列してみる。いかに膨大かがわかるというものだろう。

- ✧ ページ数 101頁（ホームページ本文のみ）
- ✧ 見出し作家数 28名（日本編最初は「横溝正史」）
- ✧ 作家数 89名（重複はカウントしない。「狂間筑恵」氏は除く）
- ✧ 本の名前 298冊（最初の本『モルグ街の殺人』。重複はカウントしない）
- ✧ 表紙画像 267冊（他に「ALLWAYS 三丁目の夕日」映画ポスター・「木枯し紋次郎」）
- ✧ 名探偵紹介 48人（シャーロック・ホームズ、金田一耕助など）

また、ホームページ掲載後の本の動きについてである。

- ✧ 2012.07.31 紹介『そして誰もいなくなった』（アガサ・クリスティー著）

2012.08.01～2014.07.31の一年間を調べると、34位に躍り出ている。紹介の前年1年間は100位以下のランク外である。

シリーズ連載期間のこの3年間を見てみると、2012.04.01～2015.03.15は17位である。

- ✧ 『十角館の殺人』（綾辻行人著）

この本は、2014.03.12に本校図書館の所蔵とした。2012.12.14に、「コラム NO.3」で作者に触れている。（本文では（日本編）第5回 2015.02.06に作者紹介）

2012.12.14～2013.12.13はランク外であるが、2014.12.14～2015.03.15は、56位に。そして、同時に『人形館の殺人』は16位、『水車館の殺人』『迷路館の殺人』も、56位にランキングしている。一作品に引っ張られて次々に読まれていったようである。

シリーズ連載期間のこの3年間を見てみると、2012.04.01～2015.03.15は61位である。

綾辻行人作品に関しては、これからもじわじわと伸びる予感がする。

今、思うこと

以上のように習高図書館ホームページにおいて、連載は続き、終了したのです。

連載途中、私は十分楽しんだ。誰より先に原稿を読めるし、本校図書館にない本の注文を出す楽しみもあった。書架にその作家の本が増えていくのだ。そして、新着本紹介の書棚に並べて生徒に

勧める楽しみもあった。しかし、大村先生は無から生み出す苦しみばかりだったと思う。扱うミステリの再読もあっただろうし、資料探索もあっただしょう。ましてや、高校生にわかるようにという当方の語句のダメ出しもあったのだから。（海外編最終『学校図書館とミステリ』参照）

今後は、大村先生が「ミステリ啓蒙活動」と書くように、ミステリファンのすそ野を広げたいと思っている。そのために何ができるかと考えているところだ。

現在考えているのは、シリーズ連載分をまとめ、製本したいと思っている。そして、たくさんの生徒に内容はもちろんであるが、この大作を目にしてもらいたい。その上で、やはり、読書会を開催したい。ひとつの作品を輪読し、どう読んだかを話し合う。3年間紹介していただき、購入し続けた「本格ミステリ」の本を、まず、活用し動かさねばモッタナイ。大村先生にも、ぜひその読書界に臨席してほしいと思っている。先生からいただくより多くの情報から、読みも深まるというものでしょう。

嬉しい報告がある。大村先生の参加なされている「SRの会」（前述 2012.12.14、「コラム NO.3」参照）ホームページにおいて、わが校図書館のホームページとリンクを張ってくださった。早速、わが図書館でも、「SRの会」と張らせていただいた。

大村先生、渾身の力を振り絞ってくださった大作を、ありがとうございました。
ミステリファン獲得に頑張りましょう。今後とも、よろしくお願いします。

菊地三智子
(2014.03.20)



SRの会・コンピュータホームページのロゴマーク ↑ とリンク案内→
スマホ・iphone 画面→

